

硫黄鳥島

○ 火山活動評価：静穏な状況

火山活動に変化はなく、静穏に経過しました。

○ 概況

・ 噴気など表面現象の状況（表 1）

上空からの観測¹⁾（第十管区海上保安本部、第十一管区海上保安本部、海上自衛隊及び東京大学地震研究所と気象庁気象研究所による）、並びに海上からの観測²⁾（第十一管区海上保安本部及び長崎海洋气象台による）では、硫黄岳火口及びグスク火山火口で従来から見られていたごく弱い噴気が確認された程度で、噴気の状態に特段の変化はありませんでした。

海上からの観測では、しばしば硫黄臭が観測されています。なお、沖永良部にある沖永良部測候所（硫黄鳥島の南東約 65 km）において、3 月、4 月及び 12 月にかすかに感じる程度の臭気が確認されました。臭気が確認された当時の気象条件から判断して、硫黄鳥島の噴気に含まれる火山ガスによるものと考えられます。沖永良部島では、これまでも同様な臭気が年に 1～2 回程度の頻度で確認されています。

- 1) 1 月 27 日（第十一管区海上保安本部）、2 月 18 日（海上自衛隊）、4 月 30 日（第十一管区海上保安本部）、6 月 24 日（第十管区海上保安本部）、7 月 5 日（東京大学地震研究所及び気象庁気象研究所）
- 2) 1 月 19 日（第十一管区海上保安本部）、4 月 30 日（長崎海洋气象台）、7 月 22 日（長崎海洋气象台）、9 月 29 日（長崎海洋气象台）

・ 火口内の熱等の状況（図 2）

7 月 5 日に気象庁気象研究所と東京大学地震研究所が共同で上空から行った硫黄岳火口の赤外熱映像装置³⁾による観測では、火口にある水溜りの西側の灰色の噴出物（図 5 下段の赤丸で囲った部分）の中央部で最高温度約 70℃を示し（図 2 上段の A 内）、水溜りの北側の領域（図 2 上段の C 内）の最高温度は約 60℃、火口に溜まった水（図 2 上段の B 内）の温度は約 30℃程度でした。図 2 上段の A、C 内で今回観測された最高温度は、2005 年 11 月 11 日の海上保安庁による観測結果と比べてどちらも若干高め（20℃程度）ですが、特段の異常はありませんでした。

- 3) 赤外熱映像装置は物体が放射する赤外線を検知して温度分布を測定する測器であり、熱源から離れた場所から測定することができる利点がありますが、測定距離や大気等の影響で実際の熱源の温度よりも低く測定される場合があります。

・ 地震や微動の発生状況

6 月までの東京大学地震研究所と気象研究所が共同で行った観測では、地震活動に特段の異常はありませんでした。

○ 火山情報の発表状況

火山情報の発表はありませんでした。

※この資料は気象庁のほか、海上保安庁、海上自衛隊、東京大学地震研究所のデータを利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 250m メッシュ（標高）』を使用しています（承認番号：平 17 総使、第 503 号）。

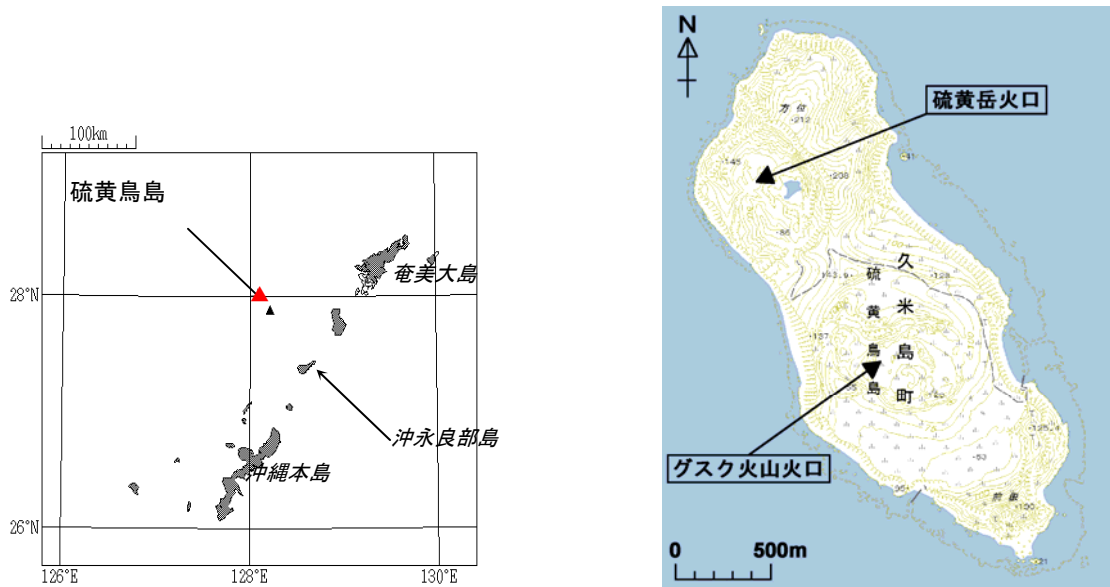










図 1 硫黄島 位置図

表 1※ 硫黄島 火口等の状況

月日	硫黄島の状況
1月19日	
1月27日	
2月18日	

表 1※ 硫黄島 火口等の状況

月日	硫黄島の状況	
4月30日		
6月24日		
7月5日	<p>気象研究所・東京大学地震研究所撮影</p> 	
7月22日	<p>長崎海洋気象台撮影</p> 	<p>長崎海洋気象台撮影</p> 
9月29日	<p>硫黄岳火口からの噴気</p>  <p>長崎海洋気象台撮影</p>	<p>グスク火山火口からの噴気</p>  <p>長崎海洋気象台撮影</p>

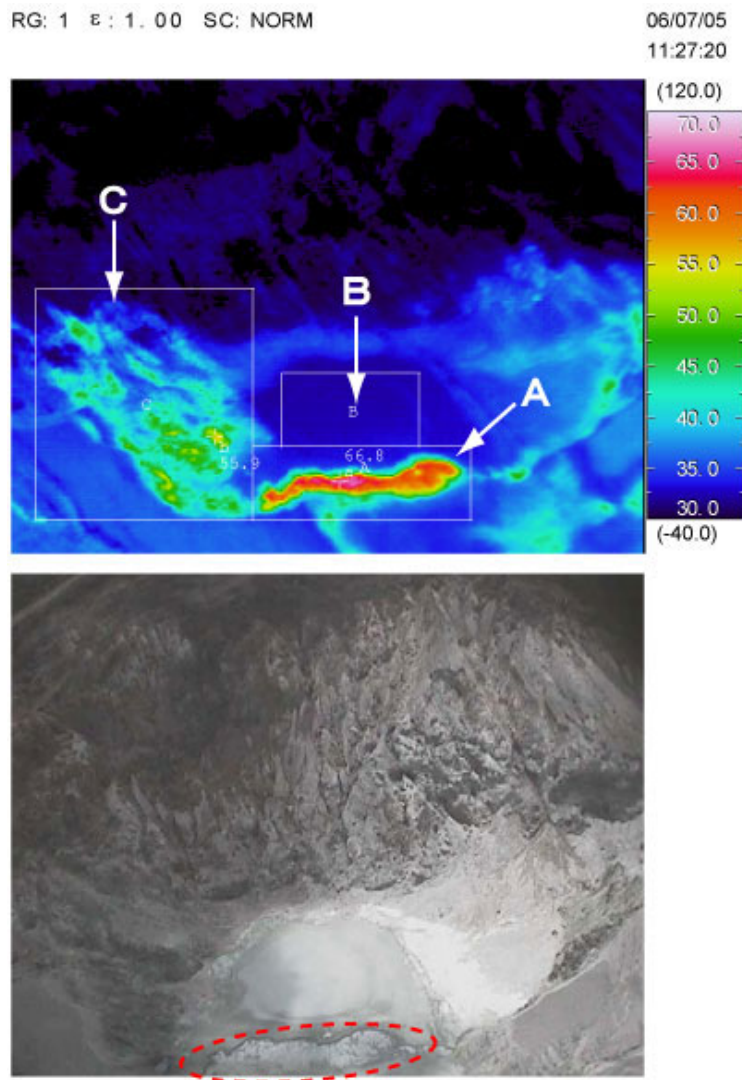


図 2※ 硫黄島 硫黄岳火口の赤外熱映像解析画像³⁾（上段）と可視画像（下段）（7月5日）
・手前側が火口の西側にあたります。
・気象庁気象研究所と東京大学地震研究所の共同観測によるものです。